

厚響、晴れやかに41年目の春です！

昨年は、皆様の温かいご支援のもと3回の記念演奏会をいずれも盛会に終え、華やかに創立40周年をお祝いすることができました。心より御礼申し上げます。

演奏会が一つ終わるたびに、「友の会」に新たな会員さんをお迎えすることもでき、事務局一同、こんなに嬉しいことはありません。新年度も皆様に愛される厚響を目指して、団員一同頑張ってますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、心も新たに次の一步を・・・

踏み出し始めたと思ったら、いきなり第80回定期演奏会が待っていました。それもプログラムが「悲愴」です・・・

春なのに、80回記念なのに、「悲愴」ですか？！

いえ、別に深い意味があつての選曲ではないのです。チャイコフスキーのこの名曲を前回厚響が取り上げたのは、1993年の第30回定期演奏会、もう四半世紀も前のこと。そろそろという声があがっても不思議ではありません。指揮は、今回が初お目見えとなります若きマエストロ、道端大輝先生です。春に相応しいフレッシュな「悲愴」が期待できそうですね！（先生の詳しいプロフィールはチラシをご覧ください。）

今回から新しい企画として、「解説さと子の気まぐれ音楽だより」がスタートいたします。皆様もよくご存知、厚響定期演奏会プログラムノートの執筆者で、そのわかりやすく軽妙洒脱な文体にはファンも多い大塩（旧姓・島）聡子さん。音大の作曲科を卒業され、お仕事の傍厚響ではヴィオラ奏者として活躍してくれました。現在は母校音大の資料館にお勤めです。友の会通信でも過去に2度、解説をお願いしたことがあります。シリーズ化することで、これからも長いお付き合いを期待しています。

さて、第1回目のテーマは「半音階」です。いきなり難しそうですが、はてさて・・・？

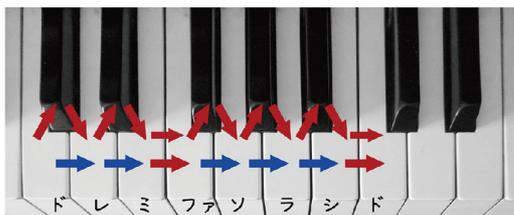


解説さと子の

気まぐれ音楽だより

vol.1 「半音階」

ロシアを代表する作曲家、**チャイコフスキー**。彼の作風と言えば、**繊細な感性と壮大なオーケストレーション**が生み出す音世界、そして、リズムの天才と言わしめる**変幻自在の作曲技法**です。彼の作品の中には、当時その斬新な作風を理解する演奏者に恵まれず、初演が失敗に終わったものもありました。しかし、作品の良さを理解する先見性を持った演奏者や指揮者が現れ、名演奏へと昇華させたことにより、多くの曲が名曲として知られるようになったのです。当時“斬新”だと言われたチャイコフスキーの作曲技法として、「**半音階進行**」を多用していることが挙げられます。半音階とは、別名**クロマティック・スケール**とも言い、こんなふうに、ピアノの鍵盤を片っ端から順番に全部弾いて行けば鳴らすことができます。



→半音 →全音

楽譜で書くとこのような形・・・



ド レ ミ ファ ソ ラ シ ド

※#(シャープ): 半音上げる ♭(フラット): 半音下げる

隣り合う音を全て鳴らす音階のことですね。このような**隣同士の音**のことを「半音」と言い、それに対して、**半音2つ分の音程**のことを「全音」と言います。この2つを組み合わせることで、「ハ長調」や「イ短調」といった**音階**が構成され、作曲家たちはこの調性を元に作曲しているのです。

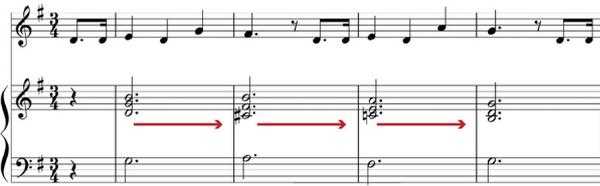
ただし、演奏する立場からすると、半音階というやつは**一筋縄でいかない**のです。ピアノの場合、ご想像のように**指がもつれそう**になります。また、弦楽器の場合は、自分の指で音の高さを決めているのですが、普段慣れているドレミの指の間に、さらに音の一つ入れていくことになります。**指と指の間隔**で半音を刻まなくてはならないので、一度音感が迷子になったら、大変！なのです。

だからといって管楽器は簡単かと言いますと、そんなことはございません。例えば、フルートやクラリネットのような木管楽器の場合、本来ならば、音孔（管に空いている穴）を順番に開閉すれば、ドレミの順番に音の高さが変わるはずなのです。リコーダーを思い出していただければわかりやすいでしょうか…シンプルな管に並ぶ音孔たちです。しかし、オーケストラで主に使う木管楽器には、キー装置（管の表面にある金属製のカップやレバーのこと。見るからにメカメカしいですね！）が使われているため、**楽器の構造上、運指も複雑**になるのです…トランペットやホルンのような金管楽器も、少ない数のピストンやレバーの組み合わせ、そして唇の加減で音の高さを変えているため、半音階が**とても難しいテクニック**であることはご想像いただけますでしょうか。

さて、その半音階を使って曲を作ると、どんな効果が生まれるのでしょうか？まずは、こちらの楽譜をご覧ください。お誕生日の方も、そうでない方も、ピアノがお近くにある方は、ぜひ弾いてみましょう！



オーソドックスな和音を使いました。和音ごとにカラーががらりと変わって、メリハリの利いた曲調になりますね。それぞれの言葉に意味のある文章のように、この短いフレーズの中で起承転結がはっきりしているようです。それでは、半音階進行を使うとどうなるのでしょうか？



内声（右手の一番下の音）にご注目ください。半音階が見つかりましたか？こうすることで、和音がじわじわと変化していく…まるでグラデーションのようで、お洒落な響きがしませんか？このじわじわと変化してゆく感じが最初は受け入れがたかったのかもしれませんが、時代を経ていくと、和音がゆるやかに移り変わるような音楽が好まれて行きます。

特に一番下の声部（ベースライン）を半音階で下行させる進行は、ゆっくりと階段を降りて行くように厳かな雰囲気が出るため、クラシックのみならず、ポップスやジャズの名曲でも効果的に使われていますよ。

さて、今回演奏するチャイコフスキーの曲にも、たくさんの「半音階進行」が登場しています。先ほど《Happy Birthday to you》でご紹介したのは、内声で半音階進行している例ですが、チャイコフスキーは旋律でも効果的に活用しています。例えば、《悲愴》の場合はこんなところに登場します。第1楽章の終盤、調性が穏やかになったころ、サビの前に渦巻くような半音階がありますね。



ピンクの色アミの部分で「半音階」が使われているよ！

音符と一緒に気分も上昇するね



また、第4楽章が始まり、緊張感が高まるころに、こんな進行も。



前者は風がさらうように鮮やかに、そして後者はじわじわと高みに登り詰めるように、それぞれメロディを誘っています。半音階というのは、整然とした音楽を、より言葉や叫びに近いものにしてくれるものだと思います。作曲家が伝えたい気持ちをそのまま音符に乗せて、音楽を繊細かつドラマティックなものにしてくれます。また、弾く方の立場としても、気持ちが張り詰めたり、つつい力が入ってしまう部分でもあります。《悲愴》という副題だけでなく、この擦り切れそうなきしみや、何も心に届かない静けさ、そして叫びたい気持ちを、半音階進行で表現しているような気はありませんか？《悲愴》以外のチャイコフスキー作品では、今回のプログラムに入っている《ロメオとジュリエット》でも半音階が多用されていますし、もっと判りやすいところではバレエ組曲《白鳥の湖》が挙げられると思います。冒頭の「情景」、あの有名なテーマは、内声で半音階進行をしていますよ。湖を渡る波紋、冷たく冴え渡る緊張感は、チャイコフスキーの繊細な和声感覚なしには生まれなかったと思います。

などなど、演奏会まで待ちきれない！という方は、この辺りの曲で予習をしながら、半音階進行探しに磨きをかけてみるのも良いかもしれません。厚響のメンバーも、半音階に磨きをかけてお待ちしていますから！

●「半音階」のお話、いかがでしたか？聡子さんは私達の大切な「知恵袋」、これからも時々、気まぐれにご登場願いますね。



今井 仁志先生の
ピロードのような音色♡



節目の演奏会にはこの方/
田久保先生



長らく常任指揮を務められた
藤田 由之先生



団長、藤田先生両ご夫妻と天野先生。
共に厚響を創ってきたお仲間です



ベルリオーズは手強い…



厚木交響楽団 創立40周年記念パーティー 2017年12月17日
レンブラントホテル厚木

第79回 定期演奏会



憧れの今井先生と共演!!のホルンパート



ホルンH嬢から今井先生に



ホルンアンサンブルに聴きほれています



団長、天野先生とご来賓の先生方

♪ 昨年12月17日、782名のお客様をお迎えして第79回定期演奏会が無事終了いたしました。翌日、友人でもある会員のM様から嬉しいメールが届きました。ご本人の許可を得て、ここにご紹介させていただきます。

昨日は厚響の演奏で午後のひと時を充分愉しませていただきました。いつも意欲的な厚響の演奏、やはり40年営々と築いてきたものを感じました。昨日のプログラム、ベルリオーズは、見応え聞き応えが有りました。ここ数回、協奏曲がプログラムに入っているのも、ひとつの楽器に光があたるのでとてもいいと思いました。今回はしかも2曲、全く異質な感じと、本邦初演に立ち会えたことも、今井さんの音色と共に心に残りました。幻想交響曲のオーケストレーションにはやはり圧倒されますね。ハーブ2台、チューバ2台、いつも乗らない楽器やその数、そしてそこで繰り上げられるドラマ、生で聴くのは初めてでしたので尚更でした。グレゴリオ聖歌が挿入されているところ、いつもながら聡子さんの解説に助けられて、CDでは感じ取れなかった発見もありました。やっぱり生はいいなど改めて思わせる演奏でした。終演後、連れあいが「たいしたもんだ」と一言。聴き手としても厚響に育てていただいている私たちです。これからも楽しみにしております。(市内在住 M様)

♪ 今回245通のアンケートが回収されましたが、その中に、「ホルンの今井さんが吹奏の間にホルンをもて遊んでいたのは何のおまじないか?」というご質問がありました。これについてお答えいたします。(ホルンパートの人に聞きました。)

「それは多分、水抜きをされていたのでしょう。」ちなみに水抜きとは、リコーダーを演奏されたことのある方ならおわかりでしょう。息を吹き込むことにより、管の内側に水滴がついてそれがだんだん溜まってきますよね。今井先生は管の一部を外して、楽器を動かすことでそれを外に排出されていたということですね。それからこれは余談ですが、今井先生がアンコールで演奏された曲は、ナチュラルホルンの曲で、バルブ操作を行わないかなりテクニク的にも難しい曲だそうです。普段と違い水平に楽器を構えていたのは、私はバルブ操作を行っていませんよというアピールでもあったようです。



インペク【にしお】
の
つぶやき



第4回

4年に一度のネタです…

フィギュアスケートと音楽

2月の平昌オリンピックでは日本選手団の大活躍が連日報道され、ちょっとしたフィーバー状態でした(原稿執筆時点ではちょうどメダリストたちが帰国したところ)。本当に素晴らしいかったですね。

冬のオリンピックと音楽といえば切っても切り離せないのがフィギュアスケートですが、ちょっとした豆知識を…。現在のルールでは、ショートプログラム、フリープログラムそれぞれの規定に沿って時間制限がありますが、選曲は全て選手の自由だそうです。以前は「動-静-動」のパターンが決められていたと記憶していますが、現在は特に規定はないようです。

何度もプレイバックが放映された羽生選手のショートプログラムでのショパン/バラード1番、フリーでの<SEIMEI>(映画「陰陽師」より)、宇野選手のショートでのヴィヴァルディ/四季より「冬」、フリーでのブッチーニ「トゥーランドット」のほかにも、ショパン、ベートーヴェンのピアノ曲、チャイコフスキーのバレエ「白鳥の湖」や次回厚響の演奏する「ロメオとジュリエット」序曲、ブッチーニやレオンカヴァッロのオペラ音楽をはじめとするクラシック、ニノ・ロータやジョン・ウィリアムスの映画音楽、ミュージカル音楽などなど素敵な曲が採用されていましたね。選手にとって、演技で曲想を表現することになる楽曲選びは非常に重要な作業でしょう。振り付け師やコーチのすすめたものを選ぶ場合や、その年ヒットした映画、ドラマなどから決める場合もありますがクラシック音楽に関しては上記のものあたりが定番なのかなあとも思います。

時間的な制約や演技構成面から、楽曲をそのまま使うことはなく、編曲して使います。たとえば宇野選手のヴィヴァルディ「冬」は、第3楽章から始まって第1楽章で終わるという編曲だったため個人的には大変な違和感がありました。前回のソチオリンピックでも浅田真央選手の使用したラフマニノフのピアノ協奏曲第二番で、不自然に繰り返しやカットが入ったり、無理やりつなげたりと違和感たっぷりでしたが…フィギュアスケートに関しては音楽は盛り立て役なので仕方ないのかもかもしれませんね。

フィギュアスケートの中でも私たちが熱中してしまう男女のソロ競技では、前回のソチオリンピック以降ルールの変更があってヴォーカル(歌詞付)の入った音楽が許可されました。

平昌オリンピックで銀メダルを獲得した宇野選手のフリーで採用された音楽は、ブッチーニ歌劇「トゥーランドット」。これは、トリノオリンピックで金メダルの荒川静香さんも採用していた曲なので皆さんもよくご存じと思いますが、クライマックスの主人公カラフのアリア「誰も寝てはならぬ(Nessun dorma)」のメロディが競技でも一番盛り上がる場所です。宇野選手は、この「誰も寝てはならぬ」の最後の歌詞「Vincerò! (私は勝利する!)」と高らかに歌い上げるシーンで、最後の難しいコンビネーションジャンプを飛ぶという演出をしました。まさにヴォーカルOKのルール改正を芸術的に味方につけようという作戦ですね!!

私は個人的には、ヴォーカルOKのルール改正には疑問があります。女子フィギュアでドイツ人選手が映画「シンドラのリスト」の音楽を使用したことについて欧米では、ツイッターなどのSNSで「この音楽で踊るべきではない」、「この曲でスケートをするのは信じられない」、「ドイツ人なのに本気なのか?」といったコメントで大炎上しているという報道がありました。「シンドラのリスト」はドイツによるユダヤ人迫害を描いた映画ですので歴史的背景を考えるとそういった声が出るのもやむなしなのかもしれません。このことから考えると、歌詞の入った音楽は場合によっては政治的メッセージを発することだって可能だということです。とても考えたくありません。スポーツや音楽といった芸術・文化は政治とかイデオロギーに左右されることなく楽しむものであるべきだと思っております。



第81回 定期演奏会

2018年9月9日(日) 14:00 開演

会場/厚木市文化会館 大ホール

指揮/長野 力哉

ワーグナー 「タンホイザー」序曲

ワーグナー 「トリスタンとイゾルデ」前奏曲と愛の死

ブラームス 交響曲第4番 小短調 作品98

今後の
演奏会
予定

2018年度市民芸術祭

2018年12月16日(日)

会場/厚木市文化会館 大ホール

指揮/柴田 真都

ベートーヴェン 交響曲第9番 二短調 作品125
他

事務局より

「友の会」会員の皆様には、今年度も引き続きご支援をいただき、心より御礼申し上げます。2月の団員総会での決定により、これからの2年間、再び今村悦子、岡田史子、西尾尚の3人が事務局を担当させていただくこととなりました。今まで以上に充実した「友の会」となりますよう頑張っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

昨年12月17日に開催された「創立40周年記念パーティー」には、「友の会」より2名の方から出席のご希望をいただき、他1名の方からは出席に代えて丁寧なメッセージをいただきました。当日の交通トラブルにより結局1名ご欠席となってしまいましたが、会場でメッセージをご披露させていただき、友の会の活動もアピールすることが出来ました。OBの懐かしいお顔やお世話になった先生方と交え、当日共演者の今井先生を中心に急遽結成されたホルンアンサンブルの見事な演奏もあり和やかな時間が流れました。前ページに掲載の写真から会場の雰囲気を感じ取っていただけたらと思います。

来たる4月22日に開催予定の第80回定期演奏会の招待券を同封いたします。名曲でありながら厚響では永らくプログラムに登らなかつた「悲愴」、きつとお好きな方も多いのでは? 私たちも、初めての道端先生とどのような演奏ができるのか、ちょっとワクワク、ドキドキしています。どうぞ、厚響の新しい一歩を体感しにいらしてくださいませ。いつもの会場でお待ちしております。

(事務局 岡田史子)